

# 百済地域で発見された横穴墓とその背景

やなぎさわかずお  
柳沢一男

## 一 はじめに

一九八〇年代以降の韓国における発掘調査の進展は、朝鮮半島三国時代諸国・地域の多様な墓制の実態を明らかにするとともに、東アジア諸世界との複雑な交渉の実態解明に多くの資料を提供しつつある。小稿で取り上げる、韓国で発見された横穴墓もそうしたひとつである。

そもそも横穴墓は、横穴式石室の影響下に五世紀中〜後葉の九州北東域で出現し、地域的偏在を見せながらも日本列島

各地で盛行した倭独自の横穴系墓制と考えられてきた。しかし、ここ二・三年のあいだに韓国忠清南道で相次いで発見された横穴墓は、紛れもなく日本列島それも九州北東域のものに近似することが判明した。一九九〇年代以降に全羅南道の栄山江流域一帯で明らかとなった前方後円墳の存在とともに、倭と百済およびその周縁域との交渉の一面をしめす資料としてきわめて重要である。

韓国の横穴墓が大きく取り上げられる契機となったのは、二〇〇三年に調査され、二〇〇基を上回る横穴墓が検出された

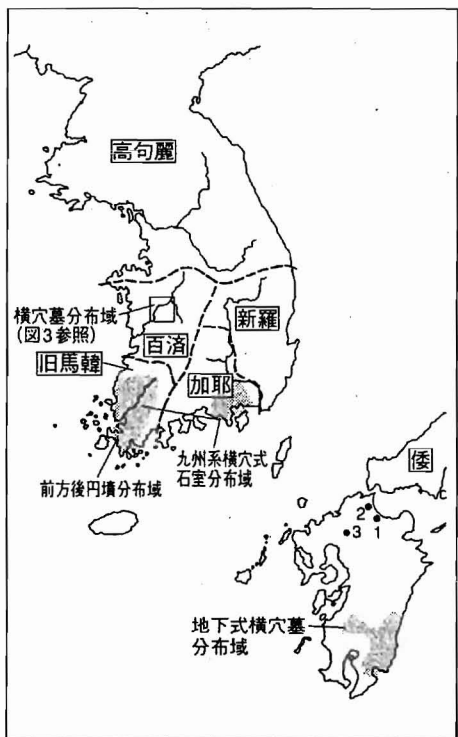


図1 九州の初現期横穴墓と6世紀前葉の倭系墓制の分布

- 1 丹芝里
- 2 熊津洞
- 3 山儀里
- 4 安永里
- 5 安永里セト・シンメ
- 6 井洞里
- 7 陵山里東
- A 公山城
- B 宋山里古墳群
- C 扶蘇山城
- D 陵山里古墳群

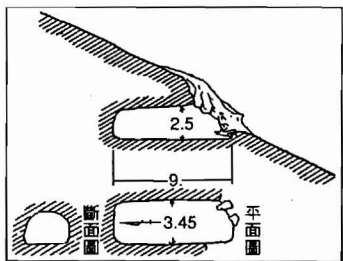


図2 「陵山里」横穴墓  
(野守ほか1940を一部改変)

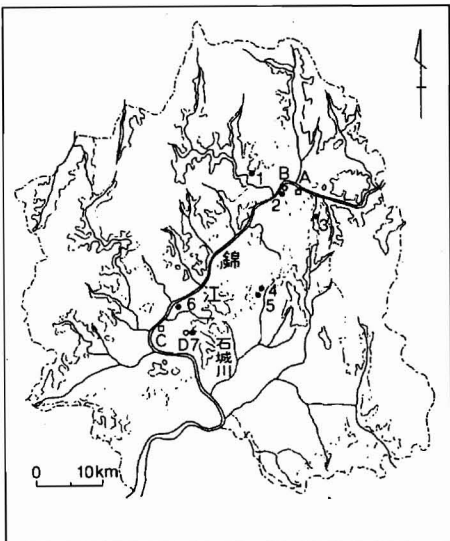


図3 公州・扶餘周辺の横穴墓分布図(等高線は100m)  
(羅2004を一部変更、加筆)

公州市丹芝里横穴墓群である。しかし、その三年前に行われた公州市の安永里セトとシンメ遺跡の二つの遺跡でも計三基の横穴墓が調査され、これらと九州北部の横穴墓との類似が指摘されていたのである。

韓国における横穴墓の存在は、早く一九一五（大正四）年に扶餘一帯を調査した関野貞氏が紹介した陵山里の「横穴塚」（関野一九一五）を嚆矢とし、『昭和二年古蹟調査報告』第二冊には「陵山里古墳」横穴墓の概略図（図2）が公表された（野守はか一九四〇）。百済の古墳を概括した金基雄氏は泗比期の墓制の一つとしてこの横穴墓を取り上げたが、対比すべき資料が無かったため具体的な論じられることはなかった（金一九七六）。

近年、韓国における横穴墓研究は積極的である。安永里セト・シンメ遺跡調査担当者の羅建柱氏、丹芝里遺跡調査担当者の池珉周氏があいついで横穴墓の築造系譜を中心とした論考を発表した（羅二〇〇三・〇四、池二〇〇四・〇五）ほか、朴天秀氏は朝鮮半島の倭系墓制を整理し、五・六世紀における倭と朝鮮半島諸地域の政治動向の視点からの理解を主張している（朴二〇〇五）。

韓国の横穴墓資料はまだ十分に整備されたとは言いがたいが、これまで公表された資料を整理し、出現の意味を考えることにしたい。

二 百済の横穴墓

これまで韓国内で確認された横穴墓は、忠清南道中部から南部にかけての錦江流域の公州と扶餘周辺地に限られる（図3）が、その分布域はさらに拡大する可能性がたかい。

1 公州市丹芝里横穴墓群（池珉周二〇〇四・〇五、図4・5・6）  
熊津期百済王陵群の宋山里古墳群から錦江を挟んで北西約六キロメートルに位置する。百済時代山城（丹芝里山城）が営まれた城在山の南側山麓尾根先端に立地し、百済時代の石築墳（石室・石櫛）一四・甕棺墓一と混在して横穴墓が発見された。高速道路建設に伴う調査のため調査区は限られており、調査地の南側にも墓域が広がると予想される。

検出された横穴墓は二三基、南側に下降する尾根稜線を境にして、その東西斜面（標高四三・六メートル）に分布する。横穴墓は二・五基程度を一単位とする小グループで構成され、

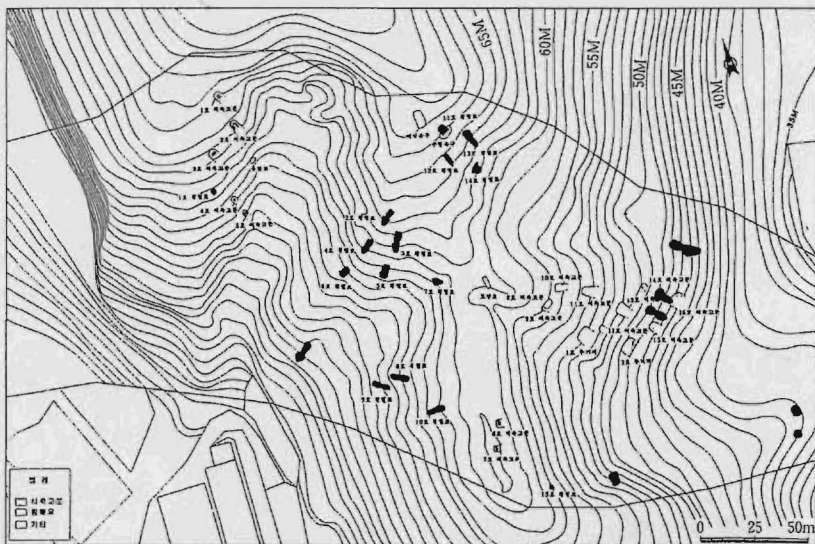


図4 丹芝里横穴群分布図（黒塗りが横穴墓）



①



②



③

図6 丹芝里横穴群写真  
① 横穴墓群全景  
② 14号横穴墓全景  
③ 14号横穴墓入口閉塞状況（池2004より）

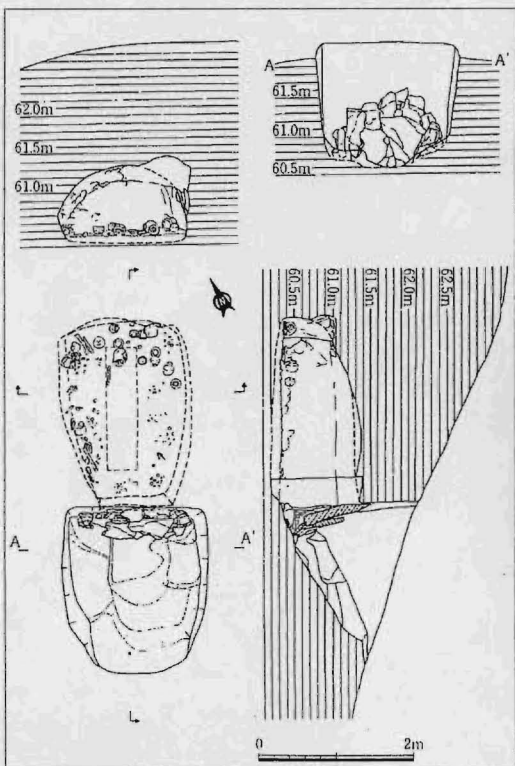


図5 丹芝里3号横穴墓（池2004より）

東側斜面に四グループ、西側斜面に三グループ程度にまとまる。報告書が未刊行のため各横穴墓の詳細は不明だが、横穴墓の特徴はおおよそつぎのとおりである。

①明確な墳丘は確認されていない。

②墓道平面形は斜面上方が広い逆梯形のものが多いが、方形のものもある。底面は玄室に向かって下降するものや垂直に深く掘られたものもある。

③玄室は平面形が縦長式（二六基）、横長式（七基）の二種に大別される。縦長式には奥壁側の幅が広い逆梯形と隅丸長方形のものがある。横断面形は半円形・トンネル形・方形などがあり、縦断面形はすべて前壁側よりも奥壁側が低くなる。

玄室床面は礫・礫と砂・砂敷きなどがある。玄室規模は、極小なものを除けば長辺一・七〜二・六、短辺〇・四〜一・七、高さ〇・六〜一メートル程度のものが多い。遺体の埋葬は直葬がほとんどだが、三号横穴墓は木棺が使用されている。

④玄室入口の閉塞は数枚の板石を立て並べ空隙を割石で充填するのが一般的、少数だが木板や平瓦・丸瓦を使用したものもある。

⑤縦長式玄室の七基の横穴墓から埋葬人骨の一部が発見され、

二基を除いて複数埋葬がみとめられる。三号墓では、成人人骨四〜五体と小児一体が確認されている。縦長式玄室の横穴墓は玄室幅が狭く単体葬を意図したものらしい。

⑥一四基の横穴墓から小型容器を主体とした副葬品が検出された。数少ないが鎌・刀子・鎌・斧などの鉄製品、土製紡錘車、金銅製耳環などもある。

⑦副葬された容器類の型式的特徴から、横穴墓の築造時期は百済熊津期前半（五世紀後半〜末葉）とされる。なお、硬質土器のなかには、須恵器ないし須恵器を模倣した杯類があるらしい（TK四七型式併行期か）。

## 2 公州市安永里セト遺跡・シンメ遺跡

（羅建柱二〇〇三・〇四、図7）

公州市街地から南に約一六キロメートル、扶餘市街地から北東に約一一キロメートル、錦江支流の石城川（ソクソン）右岸の低台地上に位置する。両遺跡は小河川を挟んで近接する。百済時代の墓制に限定すると、セト遺跡からは横穴式石室墳とともに横穴墓一基、シンメ遺跡からは漢城期に溯る土壙木槨墓や、熊津期〜泗泚期の横穴式石槨、横穴式木槨墓とともに横穴墓

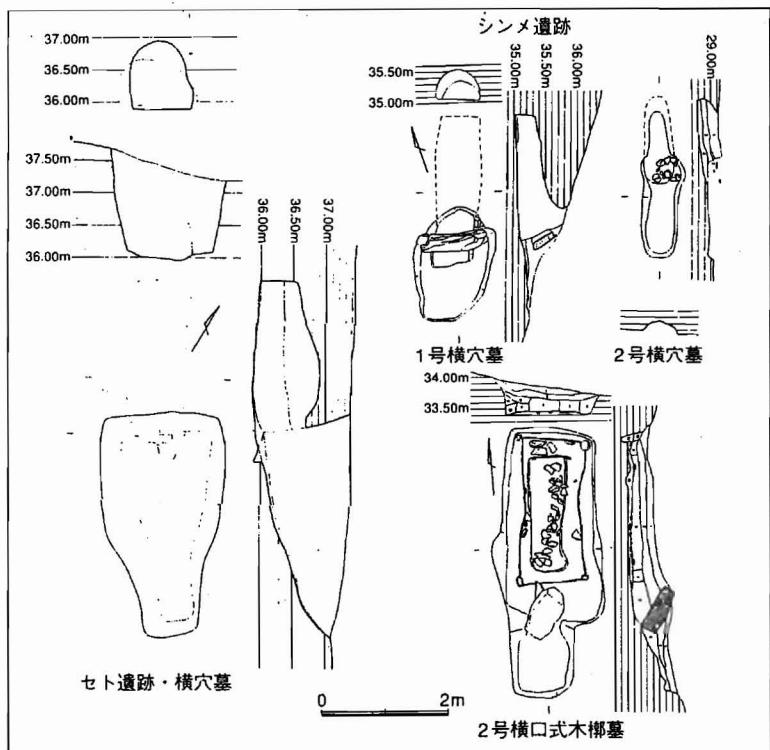


図7 安永里シンメ・セト遺跡の横穴墓と横穴式木槨墓（羅2003より）

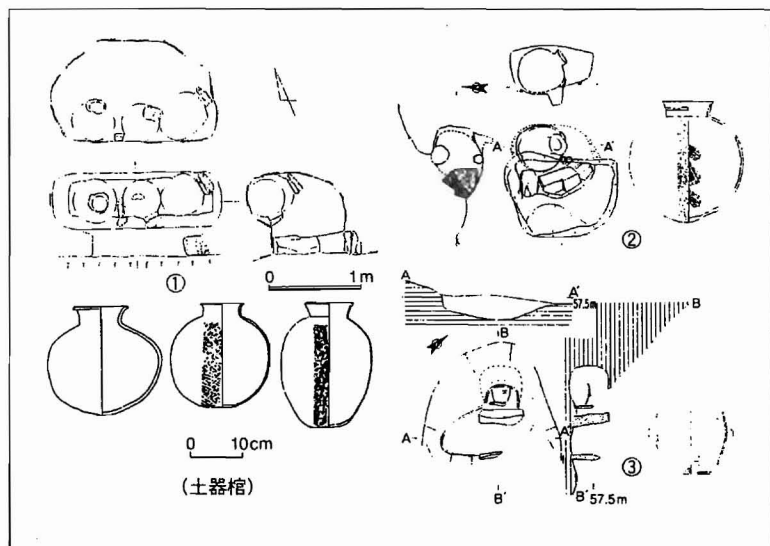


図8 土器棺を収めた横穴墓 ①熊津洞1号甕棺墓 ②山儀里4号甕棺墓 ③安永里横穴甕棺墓（遺構名は各報告書による）

二基が確認されている。

セト遺跡の横穴墓の玄室は縦長式の逆梯形、横断面は半円形である。縦断面は奥壁側が低くなるが途中で上方に拡張している。玄室規模は長さ二・三メートル、最大幅一・二メートルと大型の部類に入る。玄室内から五点の棺釘が出土し、木棺の使用が推定される。玄室入口に閉塞の石材がみとめられないため、木板による閉塞であった可能性がたかい。

シンメ遺跡の二基の横穴墓の玄室は縦長方形だが、長さ一・八、幅〇・六メートルときわめて小さく、高さも低い。一号は玄室入口を板石閉塞、二号は硬質土器の体部破片を使用して閉塞したと報告されているがよくわからない。二基の横穴墓とも玄室内の副葬品はみとめられない(図5)。

シンメ遺跡では横穴墓とともに二基の「横ロ式木槨墓」が確認された。土壙木槨墓の墓壇短辺に、横穴墓と類似する下り斜面の墓道を接続した構造である。二基とも上部が削平されているため上部構造は不明だが、もとは深い土坑内に木槨が構築されていたと思われる。木槨の下部構造が判明した二号墓の木槨は、長辺二・二メートル、短辺〇・九メートル、木槨と墓道との境を大型板石で閉塞している。副葬品は少な

く、一号墓が土製紡錘車のみ、二号墓は皆無で二点の鏝と六  
点の棺釘が出土している(図7)。

安永里セト・シンメの二遺跡で確認された三基の横穴墓と二基の横ロ式木槨墓は、築造年代を確定する資料に欠けるが、報告者は百済時代と想定されている。おそらく、熊津期前半頃であろう。

### 3 扶餘周辺の横穴墓

百済領域で最初に横穴墓が確認された地域である。現在、二例の横穴墓が知られているが、資料的に多少の不安が残る。まず第一は、昭和二年度古蹟調査報告に「陵山里古墳」として図示されたもの。横穴墓の詳しい説明がないけれども、図面に注記された規模(長さ約二・七、幅約一、高さ約〇・七メートル)からみて、関野貞氏が陵山里東古墳群(1)調査の際に確認した「横穴塚」と同一のものであろう(図8)。玄室は隅丸の縦長長方形、墓道はすでに流出している。これに間違いないとすれば、陵山里東古墳群の一角に営まれた点から扶餘期の築造と想定される。

第二は、扶蘇山城(2)から北東に約六キロメートル、錦江左岸

の井洞(3)遺跡第四号建物跡の下部から小型の横穴墓が発見されたという。規模・構造の詳細は明らかにされていないが、調査者の柳基正氏は熊津期後半―泗泚期前半の築造と想定している(柳二〇〇三)。

### 4 甕棺を安置する横穴墓(図8)

横穴墓の玄室に土器棺を安置したものが、韓国では甕棺墓として扱われることが多く、横穴墓として認識され始めたのは最近のことである。公州市熊津洞古墳群(安承周一九八二)、公州市山儀里古墳群(李南爽一九九九)のほか、安永里遺跡(李南爽ほか二〇〇〇)から各一基ずつが検出されている。

熊津洞古墳群は石室墳一五・石槨墳四・甕棺墓(土器棺)二、山儀里は石室墳四〇・石槨墳一五・甕棺墓三などから構成される(いずれも百済時代に限る)。

山儀里・安永里の横穴墓例は、土器棺を収める程度の小規模の玄室だが、玄室前面に下り斜面の墓道を備え、入口を板石で閉塞するなど、横穴墓の築造原理を保持している。熊津洞一号甕棺墓(横穴墓)は、横長式楕円形の玄室(奥行き〇・四、幅一・六、高さ一・一メートル)とやや大きめで内部に三基

の土器棺を収める。入口部は詳細不明だが塊石で閉塞したらしい。

百済の土器棺墓(甕棺墓)は、漢城(4)泗泚期にわたって下位の墓制として用いられている。外部施設は土壙内に納めるのがふつうだが、簡単な石槨を設けるばあいもある(もちろん横穴式石室例もある)。土器棺を収める墓室にあえて横穴墓構造を選択したのはそれなりの理由があったとみたい。

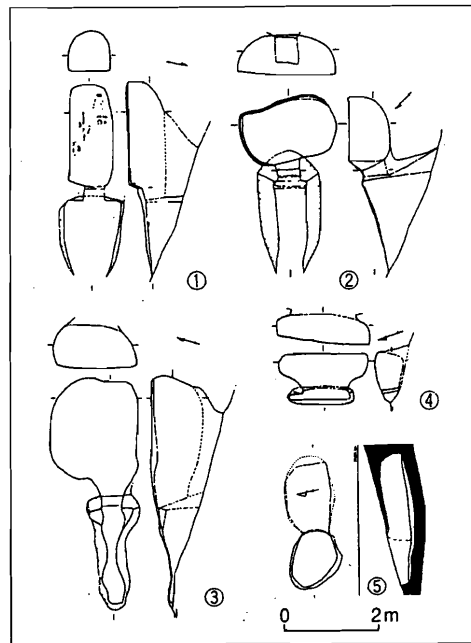
### 三 百済横穴墓の築造系譜と出現背景

#### 1 百済横穴墓の築造系譜

これまで百済領域で確認された確実な横穴墓は以上のとおりである。冒頭に述べたように、東アジアで横穴墓が顕著に展開したのは日本列島である。地域的な偏在を示しながらも南は宮崎県、北は宮城県にいたる広域に分布し、少なくとも三万基程度の横穴墓が築造されたと推測される。ちなみに九州だけでも一万二千基を上回り、なかでも豊前・肥後の突出が目立つ(九州前方後円墳研究会二〇〇〇)。横穴墓は五世紀後葉に豊前地方に出現したのち、後期群集墳の一形式として盛行した。

お、豊前で発案された横穴墓は、さほどの時間をおくことなく筑前東部（遠賀川流域）、筑後北部（小郡周辺）でも築造を始めていくことに注意したい（図9）。

それでは、百済横穴墓の築造時期はいつ頃にさかのぼるのか、丹芝里が鍵を握っているだろう。丹芝里では縦長式の玄室のほかに、横長式のものも多くみとめられ、墓道が垂直に掘り込まれたものがあると概要報告は記述する。これらの横穴墓の詳細は不明だが、豊前の初現期横穴墓の横長楕円形のものに對比できるものか、それとも九州南東地域に盛行する地下式横穴墓と関連するものか興味深い。一例を挙げれば、丹芝里一四号横穴墓は全体の構造が、<sup>竹並</sup>原A八号と類似し、入口部板石閉塞は宮崎県崩先地下式横穴墓群に酷似する。いずれにしても、五世紀後半末葉に唐突に出現する百済横穴墓の出自は、九州で案出された初期横穴墓に求められる可能性がたかい。ただし、初期横穴墓は筑前・筑後でも築造されているから、その故地をとくに限定することはできないだろう。それにしても、二、四基程度でひとつのグループを構成する丹芝里の横穴墓の墓域構成は福岡県竹並遺跡や大分県上ノ原横穴墓群の様相ときわめて類似する。グループ構成の背景



- 竹並
- ①上ノ原A 23号 (縦長・楕円)  
 ②上ノ原A 11号 (横長・楕円)  
 ③上ノ原A 4号 (方形・楕円)  
 ④上ノ原A 8号 (横長・楕円)  
 ⑤横倉鍋倉2号 (縦長・楕円)  
 (各報告書より)

図9 九州の初期横穴墓諸形式

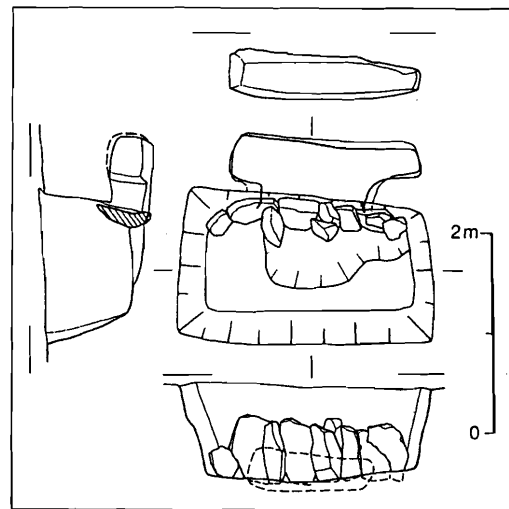


図10 崩先4号地下式横穴墓(報告書改変、再トレース)

がどのようなものか、遺存人骨による親族関係の研究も期待される。

いまひとつ、安永里シンメで確認された「横口式木槨墓」について付言しておきたい。羅建柱氏は、先行する土坑木槨墓に横穴系墓室のアイデアを取り入れた自生的な遺構と推測する。その可能性がたかいが、類似する遺構が福岡県甘木

安永里セト・シンメで検出された横穴墓は、羅建柱氏が指摘するように、九州北東域の豊前一带の初期横穴墓と顕著な共通性をしめす(羅二〇〇四)。玄室入口に明確な袖部が表現されない点に違いがあるけれども、両者の関係を否定するような要件ではないだろう。他方、池珉周氏は、百済・九州の横穴墓の出現時期が近接すること、九州の初期横穴墓にしばしば朝鮮半島系文物が副葬されることを根拠に、横穴墓の起源を九州とする見解に再考を求めている(池二〇〇四・〇五)。

倭の横穴墓起原問題は諸説あり決着をみていない。それは、五世紀後半前期と想定される初現期横穴墓形態の多様性による。最近、九州の横穴墓の成立過程を検討した田代健二氏は、そのなかでも玄室平面形が横長楕円形のものが縦長長方形のものよりも先行し、前者の祖型を南九州の地下式横穴墓、後者の祖型を竪穴系横口式石室と推測した(田代二〇〇五)。また横穴墓の成立に先行して地下式横穴墓が伝播した可能性を想定し、こうした地下式横穴墓のインパクトのもとに横穴墓が成立したとみた。これまで十分説明されることがなかった出現期横穴墓の玄室形態の多様性や地下式横穴墓の墓道に近い事例があることの説明として妥当な見解と思われる。な

市古寺墳墓群中にあることにも留意したい。この遺構は「竪穴系横口式削貫石室」とややこしい名称が付されているけれども、玄室を地表から岩盤に掘り込み、その短辺に下降する墓道を取り付けた構造である。玄室上部がアーチ形に狭まり、天井部に石材を架構するものと木板を架構するものがあるらしい。玄室入口はおもに板石で閉塞される(橋口一九八三)。

ただ、内部に木槨を構築したり、木棺を使用した可能性はひくい。六基が調査され、そのうちの一基は五世紀後葉末葉の築造である。「他人の空似」かもしれないが、二者の遺構は同時期の百済・倭の墓制のなかでも孤立しており、両者の関係を探ることも必要だろう。

## 2 百済における横穴墓出現の背景

それでは百済における横穴墓の出現は何を語るのか。墓制の伝播は、文物・情報移動と異なり、伝統的な墓制を保有した被葬者もしくは被葬者集団の移動(移住)と移動地での死去と埋葬をしめす場合が多い。もともと九州東北部に展開した横穴墓が百済領域に出現する要因は、朝鮮半島諸勢力と倭国の政治動向のなかで理解することが肝要だが、百済墓制の

なかで横穴墓の位置・様相を総合的に把握することも重要である。この点から横穴墓の様相を整理するとおおよそつぎのようになる。

①現在の横穴墓分布状況はどこまで本来の様子を反映しているか不明だが、熊津期王都の公州周辺と泗泚王都の扶餘周辺に集中する。

②横穴墓の築造は公州周辺地で五世紀後葉末葉に始まる。終焉はよくわからないが扶餘周辺の横穴墓が確かなものとするれば、泗泚期前半に下る可能性がある(井洞里、陵山里東)。

③丹芝里遺跡を除いて横穴墓が群集する例はない。横穴式・横口式石室墳など他の墓制と混在するが、決して多数派を形成することはない(熊津洞・安永里セト・シンム)。

④丹芝里例を除いて被葬者に添えられた副葬品は概して少なく、副葬品があっても容器類が主で威信財などは含まれない。

⑤遺体の葬法は直葬がふつうで、まれに木棺使用(丹芝里三号、安永里シンメ二号)や土器棺を収めるばあいもある(熊津洞・山鏡里・安永里)。

熊津期百済の墓制は多様である。すでに多くから指摘されているように、該期の墓制は、磚室・穹窿式横穴式石室↓横

口式石室・竪式穴石槨↓土器棺墓(甕棺墓)・土壙墓という階層構造が想定され、副葬品構成もおおよそこの階層性に対応している(李一九九五)。横穴墓は最下位層よりも上位とはいえ、副葬品の保有度も少なく、百済を特徴付ける木棺使用例も限られている。何よりもその数がきわめて少なく、今後の調査進展をまたねばならないとしても、さほどの数的増加は望めないのではないか。百済の墓制のなかでは異様なあり方といわざるを得ない。

百済に横穴墓が出現する五世紀後葉末葉、周辺諸地域に倭系墓制の影響が顕著となる。旧馬韓(マハ)の地であった柴山江流域では前方後円墳の築造が始まり、六世紀前葉までのあいだに一三基が相次いで築造されている。前方後円墳の埋葬施設には北部九州系横穴式石室が採用され、周辺の中型円墳でも北部九州系や肥後系の横穴式石室を取り入れるのがみとめられる(柳沢二〇〇一)。また時期がやや下るが石屋形や石棚など九州系要素を取り入れた横穴式石室が慶尚南道宜寧(キョンサンナムド、ウイニョン)周辺で点々と確認されている。

ここで想起されるのは、文献から想定される漢城陥落後の倭(雄略)王権による積極的な百済支援と、九州諸勢力の関

与である。四七九年、雄略は倭国で生まれ育った末多王(人質として倭国に来た昆岐王の第二子、のちに東城王として百済王に即位)を「筑紫国の軍士五百人」に護らせて百済に帰国させる。またやや遅れて、新羅と対立するようになった加耶諸国にも軍士が派遣された。軍士たちは、西日本のみならず東日本からも徴発されたらしいが、なかでも地理的に近接する九州からの徴発がもっとも多かったと推測される(山尾一九九九)。

百済に派遣された軍士のなかには任地で没したものも少なくないであろう。公州周辺で発見された横穴墓の被葬者は、倭国から派遣され、その地で没した軍士たちをイメージさせる。丹芝里三号墓の幼児の追葬は、彼らのなかに定着した人びとがいたことをしめす。また、横穴墓内部に土器棺を収める風習は基本的に倭でみとめられないものである。横穴墓の築造原理を維持しながら百済的な土器棺埋納を取り入れた背景もこうした文脈のなかで理解できるだろう。

先述したように、慶尚南道の小加耶(ソカヤ)や大加耶(テダヤ)周辺でも、六世紀前葉にかけて九州系横穴式石室が目につく(柳沢二〇〇二・朴二〇〇五)。これらの地域は新羅・百済との関係で複雑な政治動向をしめすが、倭から多くの軍士が派遣された

ことは文献史学者が説くところだ。この時期、九州北部は磐井の乱を制圧した倭王権の兵站基地として機構整備がすすめられ、以前にもまして多くの軍士が徴用されたであろう。この地域の九州系横穴式石室も、こうした情勢を背景に出現したに違いない。

先述したように、丹芝里の横穴墓のなかには南九州の地下式横穴墓に類似する墓室の存在が想定される。一般に地下式横穴墓の副葬品は僅少な例が多いなかで、五世紀後葉末葉に限って甲冑副葬が顕著である。この背景には、朝鮮半島の緊張に対応すべく、広域にわたっての軍事編成が想定される(川西一九八三・二〇〇五)。五世紀後葉以降、朝鮮半島への通交ルートのなかでも豊前は西日本と九州の結節点として重視された(柳沢二〇〇四)。豊前における初期横穴墓の南九州諸地域の地下式横穴墓との類似性は、日向各地から徴発された軍士の集結地であったことに由来する可能性がたかい。南九州の軍士が海を渡ることもあったのである。

百済地域で判明した横穴墓は、全南地方の前方後円墳や加耶諸地域に出現した九州系墓制と一連の歴史動向のなかで理解すべきである(朴天秀二〇〇五)。ここ二〇年来、調査・研

り百済時代に下る横穴墓は見あたらぬ。

〔引用文献〕(五〇音順、ハングルは日本語に置き換えた)

安承周一 一九八一「公州熊津洞古墳群発掘調査報告書」(百済文化第一四輯) (ハンギョク)

李南爽 一九九五「百済石室墳研究」、学研文化社 (ハンギョク)

李南爽 一九九九「山儀里遺跡」(公州大学校博物館) (ハンギョク)

李南爽ほか 二〇〇〇「安永里遺跡」(公州大学校博物館) (ハンギョク)

川西宏幸 一九八三「中期畿内政権論」『考古学雑誌』第六九巻第二号

川西宏幸 二〇〇五「同型鏡とワカタケル—古墳時代国家論の再構築」同成社

金基雄 一九七六「百済の古墳」、雄山閣

九州前方後円墳研究会 二〇〇〇「九州の横穴墓と地下式横穴墓」(第一四回九州前方後円墳研究会資料集)

関野貞 一九一五「百済の遺跡」『考古学雑誌』第六巻第三号

田代健二 二〇〇五「横穴墓の成立過程」『古文化談叢』第五三集

池珉周 二〇〇四「公州丹芝里横穴墓群発掘調査概報」『統一新羅時代考古学』(第二八回韓国考古学全国大会発表資料) (ハンギョク)

池珉周 二〇〇五「公州丹芝里横穴墓群発掘調査概報」(能登原孝道・端野晋平訳『日本考古学』第一九号)

忠南発展研究院 二〇〇三「公州長善里土室遺跡」(遺跡調査報告第四冊) (ハンギョク)

羅建柱 二〇〇三「公州安永里セト・シンメ遺跡」(財)忠清埋蔵文化

究の進展によって、日本列島内での朝鮮半島系文物・遺構はかなり明確になり、渡来時期にもいくつかの波があることも判明しつつある。現在、それら渡来系文物・遺構の具体的な源流地を特定する作業も進展している。日本—朝鮮半島間の渡来の波は、東アジア情勢を鋭く反映している。その点で、百済領域から発見された横穴墓は、五世紀後葉から六世紀中葉にわたる倭王権と百済・新羅・加耶諸国との複雑な国際情勢をしめすとみてよいだろう。

本稿をまとめるにあたって、情報・文献収集に下記の方々から多大な援助を受けた。記して感謝申し上げる。東潮、亀田修一、後藤直、権五榮、武末純一、朴天秀、松井忠春、吉井秀夫(敬称略)。(宮崎大学教育学部教授)

〔註〕

(1) 関野氏が調査を行った当時、この古墳群には正式な名称はなかったらしい。関野文献の記載内容からこの古墳群の一角で見出したものと推測した。

(2) 韓国の横穴墓関連文献のいくつかは公州長善里土室遺跡の「土室」遺構(原三国時代の特殊な貯蔵穴)の一部に横穴墓の可能性を想定しているが、報告書(忠南発展研究院二〇〇三)を検討した限

財研究院文化遺跡調査報告第三〇輯) (ハンギョク)

羅建柱 二〇〇四「百済地域で確認された横穴墓と横口式木槨墓について—公州安永里遺跡例を中心に—」『錦江考古』創刊号 (ハンギョク)

野守健・神田惣蔵 一九四〇「昭和二年度古蹟調査報告」第2冊(朝鮮総督府)

橋口達也 一九八三「古寺墳墓群II」(甘木市教育委員会)

朴天秀 二〇〇五「三国・古墳時代の日本列島と韓半島における渡来人」『九州における渡来人の受容と展開』(第八回九州前方後円墳研究会)

柳沢一男 二〇〇一「全南地方の柴山江型横穴式石室の系譜と前方後円墳」『朝鮮学報』一七九

柳沢一男 二〇〇二「日本における横穴式石室受容の側面—長鼓峯類型をめぐって—」『清溪史学』第一六・一七合輯号

柳沢一男 二〇〇四「九州における前方後円墳の築造動向」『西南四国—九州間の交流に関する考古学的研究』(平成一四—一五年度科学研究費補助金研究報告、研究代表者・下條信行)

山尾幸久 一九九九「筑紫君磐井の戦争」、日本出版社

柳基正 二〇〇三「泗泚期木槨施設建築址について—扶餘井洞里遺跡建築址を中心に—」『国立公州博物館紀要』第三輯 (ハンギョク)